
星空の約束

* 真央 *

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

星空の約束

【Zコード】

Z2872Z

【作者名】

* 真央 *

【あらすじ】

紗奈は3年前まで一緒にいた雅人を日々探し求めている。

キミはどこにいますか？

「恋愛漫画はやりたくない。」（前書き）

連載の恋愛をかくのは
苦手ですが
精一杯がんばります。

「君はキミがこない。」

あの中の夏、

キミと一緒に星空を見上げた。

また一緒にって約束したよね？

どうして私の前から消えちゃったの？

”また連れてつてあげるよ”

そういったのは嘘ですか？

私はいつまでキミを待てばいいんだらう？

私はキミを信じて……信じて……
もう3年の月日が流れたよ。

それでもキミとこう存在を
忘れない。

深津 雅人

ふかつ
まさと

山岸 紗奈

やまぎし
さな

×

キミは、いつか戻ってきますか？

私に・・・笑いかけてくれますか？

「ここにはキミがない。」（後書き）

どうでしたか？

よかつたら感想下さいつ

改善できるよう
努力します。

過去の想いは切り裂けない。（前書き）

遅くなりましたつ

過去の想いは切り裂けない。

「明日から高校2年かー・・・。」

「

私は桜散る中1人で
ぼそりとつぶやいた。

今は春休み。

もう高校1年は終わり
次の学年に移るというのに
なんで・・・

こんなにも雅人を
探し求めているのかな・・・。

雅人は一体
何で私の前から
姿を消したの・・・??

あの時 . . .
声をかけていたら
何か変わっていたのかな . . . ?

中学2年、夏。

帰り道

私は雅人を呼び止めた。

「雅人ーー！」

「ん？どうした、紗奈。」

「今日花火あるんだってーー！」

「ふーん . . . 行きたいの？」

雅人は
にこにこ笑っている。

「意地悪 . . . / / /」

「ふふ 僕にとつては褒め言葉だし。
で？どうなの？行きたいの？」

「当たり前じやん！！

行きたいよ。

「おつけ」

じやあ午後7時に待ち合わせね。

「わかつた！
いやあね」

そういう別れた私達。

私はワクワクした気持ちを
隠しきれずに
頬が緩んでしまう。

こんなにも

楽しみなのは雅人とだつたから。

でもあれは

何かおこる予兆だったのかな。

ね
え
・
・
雅
人
?

過去の想いは切り裂けない。（後書き）

なんかよくわからないことにな
なつていたらすみませんっ（汗）

切なげに微笑む君は停げに散る予兆。
(前書き)

早め更新ですつ

切なげに微笑む君は停げに散る予兆。

「待つた？」

「ううん 雅人を待ってる間も
なんかワクワクしてたよっ。」

「そっか。」

雅人は少し照れながら
ふつと笑みをこぼす。

「じゃ、行こう。」

「うん。」

2人で手を繋いで
私は雅人に引かれるまま
ついていく。

でもその向かう先には
公園しかみえない。

「ど」「行くの？」

私は花火がみれない違つどこかへ
行くのかと心配になつた。

「ん？公園だけど？」

「あ、そりなんだ……。」

ほっと息を漏らす。

「どうかへ行くとも困った？」

ふっと切なげに笑う。

「え・・・？」

「心配しなくても
俺はどこにも行かないよ。」

そういうて雅人は微笑んでるのに
なぜか寂しそうにみえたのは
私の気のせい・・・だよね？

「ああ、行くよ。」

「うう・・・。」

少し心掛かりになりながらも
私達は公園に向かった。

切なげに微笑む君は停げに散る予兆。（後書き）

必死に恋愛っぽくしようと
頑張り中です（笑）

消えた華、消える言葉、今あり続ける私達。（前書き）

遅くなりましたっ

なんかシリアスっぽい??

消えた華、消える言葉、今あり続ける私達。

「わあ . . . 綺麗 . . . / / /

「でしょ？六場だったんだ。」

私達は公園の芝生に座り込む。

ドーンと大きな音を鳴らし
鮮やかな華を咲かす。

赤、ピンク、緑、青 . . .
色々な華が夜空を照らしていく。

「すゞいね . . . / / /

「だな。すつごい綺麗だ・・・。」

少し感傷に浸る。

そんな思いから

1つの疑問が浮かんだ。

来年の夏もまた雅人と
花火みれるかな？

つて。

「ねえ、雅人。」

「ん？」

「また、来年も一緒に来てくれる？」

雅人は私の疑問に目を見開く。

ゆっくりとその表情は微笑みに変わった・・・けど

「・・・ああ。」

なんだか違和感があつた。

何だらう？

「心配するな。また、来よ。」

「うん。」

私達が話している間に鮮やかな華達は
儘く消えていった。

「あ……花火終わっちゃった……。」

「ほんとだな。でも、まだ楽しみはあるから。」

「ま、ここで寝転がってみて。」

「え……？」

「いいじつで……。#生で？」

「まあいいからさ。」

「うん . . . ?」

意味も分からず言つまゝに寝転ぶ。

すると雅人は何故かカウントダウンしだした。

「5、4、3、2、1 . . 。」

「え？」

訳も分からず戸惑い
横にいる雅人を見つめる。

「ほら、夜空見て？」

「え . . . 」

雅人から田を離して上を見上げると
夜空には星が降ってきた。

「何これ . . . ？」

「流星群。」

「へ . . . ?」

「流れ星みたいなものだよ。」

「やうなんだ . . . 。」

「降つてきてはすぐに消え
また降つてくる。」

「消えても消えても現れる。」

「流星群はすゞよね。」

「え？ 何が？」

「確かに降る量がすゞいけど . . . 。

「消えてもまた降つてきて
俺らの前に現れる。」

「ああ、やうだね。」

「消えているのにまた姿を現すのは
すゞい勇気がいるはずなのに星には簡単なのかな。」

．．．簡単かな．．．？

「うーん．．．私は簡単じやないと黙つたび
一生懸命だからいいんじやないかな。」

「そつか．．．。」

でも何でそんなこと
思つたのかな．．。

何で．．．？

今思えばそれが

私に残した言葉だったのかな。

消えた華、消える言葉、今あり続ける私達。（後書き）

頑張り中ですっ

あ、明日で学校終わりだり

ヤツタネ（ニヤリ）

愛しげ君の心の中に触れられぬな。 (前書き)

遅くなりましたっ！

甘ひみつきを語めてみました（笑）

愛しい君の心の中に触れられない。

「写真、をさ、撮りたいんだけど……。」

雅人は言いづらそうに口を噤む。

「ん？ なあに？」

「あ、のさ……。」

雅人が声をかけたのは夜空の流星群を見つめて30分ほど過ぎた頃だった。

「うん。」

「そろそろ行こうか。」

「いいよ？」

雅人にこんなこと言われたのは
初めてだつたので快く承諾する。

「じゃ写メで。」

「おつけー」

「3・2・1・。」

パシャっと携帯が音を鳴らす。

あ・・・すゞく珍しい・・・。

「何さ・・・? / / /

「雅人が照れてる・・・。」

「つ・・・/ / / だ、だめなの?」

「いや、可愛いなって」

雅人は顔が整つていて
かつこいいからなあー···。

なんで私が付き合えたのがも
不思議なくらいだし。

うーん···。

私が頭に疑問符を浮かばせている間に
唇にあたたかいものが触れる。

「ま、雅人？」

「もう一回···。」

何回もの優しいキスが降つてくる。

「好き···大好き···紗奈···。」

雅人は抱きしめながら
か細く囁く。

「私も雅人が好きだよ・・・。」

夜空の下で”好き”の言葉を伝えあう。

「今日は楽しかった？」

「うん。特に夜空すくべ綺麗だった・・・。
また来年も来たいな。」

「そつか。じゃあまた連れてってあげるよ。」

「ほんと?」

「ほんと。じゃ帰ろうか。」

「うん」

私は無邪気に笑みを零した。

ただ純粋に雅人と約束出来たことが
嬉しかった。

嬉しかったよ。すくべ・・・すくべ・・・。

私達は帰りもまた手を繋ぐ。

帰りはただ

たわいのない話をして笑つてた。

私は話しながら幸せそうに笑つてたんだ
・
・
・。

「じゃばいばい。」

私は雅人に手を振る。

「・・・ん。ばいばい。」

私は家に入ろうとした瞬間

雅人に呼び止められる。

「紗奈！！」

「雅人？」

「俺のこと……好き？」

「……？好きだよ？それがどうしたの？」

「そつか。じゃあばいばいっ！」

「うん？ばいばい。」

何が言いたかったんだろう？

ずっと悩んでた。

今でもその真理はわからない。

教えてほしかった……。

雅人は何が言いたかったの？

愛しげ君の心の中に触れられなご。（後書き）

そろそろ過去編終了ですかね？？

君は言葉と同様に消え去つた。（前書き）

さあ 章がかわります（笑）

君は言葉と同様に消え去った。

学校に行くときは雅人と行くのに

今日の朝は雅人がいなかつた。

「ん? なんでだろう . . . ?」

基本遅れない真面目な性格なのに . . 。
風邪かなあ . . . ? ?

不思議に思いながらも学校に向かう。

10分後くらいたつた頃、学校に着く。

一九四九

クラスメイトから声がかかる。

「おせむ」

クラスに入つて周りを見渡しても
やつぱり雅人は来ていない。

「雅人は？」

「んー？ いないねー。一緒に来なかつたの？」

גָּדוֹלָה

何でだろ・・・。

なんだか胸騒ぎがする · · ·。

「はーい。座つて。」

担任から声がかかる。

もうそんな時間・・・。

雅人は風邪かなあ・・・??
後でメール送ろうかな。

「今日はみんなにお知らせがある。」

急に重い口調で話しだす担任。

何だろうと耳を傾ける。

「今日急に転校した人がいます。」

転校 . . . ? ? ?

誰だろう。

こんな時期にいなくなるなんて . . . 。

「それは . . . 」

そこから聞いたものは
信じがたい言葉だった。

「クラスメイトの深津雅人くんです。」

「 . . . え？」

私はふいに言葉が漏れた。

だってありえない人が担任の口から
でてきたのだから。

君は言葉と同様に消え去つた。（後書き）

いなくなりました（笑）

不安と想いはただ静かに積もりゆく。（前書き）

遅くなりましたつ（笑）

不安と想いはただ静かに積もりゆく。

「どうしましたか？山岸さん。」

担任の声が聞こえてくる。

私はただぼーっと放心状態に陥る。

「山岸さん？」

こんなこと聞いてなかつた。

雅人は昨日まで私のそばで・・・横で
微笑んでいたのに・・・。

「何で・・・？」

ふいに口から漏れる。

「いや、私も今日聞いたばかりですので
よくは知りません。」

担任は律義に返事を返してくれる。
けど私は頭に入っこない。

昨日にそんなこと聞いてない。

何で・・・何で・・・私に言つてくれないの・・・?

私は彼女じゃないの・・・?

何で・・・つ・・・。

「何で・・・」

「えー？ 山岸さんー？」

私は教室から出て走つていいく。

ただがむしゃらに、無我夢中になつて。

雅人を探しに行くんだ。

ただその思いだけで。

私は走りだしたんだ。

不安と想いはただ静かに積もりゆく。（後書き）

ああいなくなりましたね（笑）

零れる涙はすべて君へのだ。 (前書き)

シリアルですねー。

零れる涙はすべて君へのもの。

雅人の家の前につく。

「いほつ ． ． ． はあはあ ． ． ． 」

喉が渴くし汗は流れる。

当たり前だ。だって夏なんだ。

そんなことさえ無視してでも
とにかく雅人に会いたかった。

ピンポンとチャイムがなる。

なのに
誰も出てこない。

「雅人・・・？いないの・・・？ねえ・・・雅人！！」

誰もいない道中で大声をあげる。

迷惑だと思うけど今はそんなこと気にならなかつた。

「雅人！雅人！雅人！雅人！雅人おーーー！」

ただ泣きながらがむしゃらに
雅人の名前を呼び続けた。

そこで視界は真っ暗になつた。

「「めん . . 。
置いていつて「「めん . . 。 紗奈、大好きだったよ . . 。
」

そんな声を残して . . 。

零れる涙はすべて君へのだ。 (後書き)

暗すきて暗すきて . . .

（笑） ひのモチベーションも下がる

私と約束を置き去りにして君は飛び立つ。（前書き）

はつはつは（笑）

雅人は鳥になりました（（嘘です（笑）

私と約束を置き去りにして君は飛び立つ。

目に入ってきた景色は真っ白の天井だった。

「…………」

「保健室よ、山岸さん。」

保健室の先生が横から声をかける。

「熱中症でね、倒れてるところを
ある男の子が助けてくれたのよ。」

ある男の子……？

ふと謎問に思ひ。

あの周りに人なんていただろうつか?
．．．いなかつたはず。

『「めん．．．。

置いていって』「めん．．．。紗奈、大好きだったよ．．．。

』

そんな言葉が脳裏に浮かぶ。

あの声は．．．雅人?
雅人の声がした．．．。

「すいません。それは深津雅人くんですか?」

「．．．いえ、違うわ。違う学校の男の子よ。」

「そうですか．．．。」

ただ声が似ているだけだったのかな。
雅人はどこに行っちゃったのかな。
。

ねえ、雅人は一体どこにいるの？

昨日まで笑っていた雅人は
いなくなっちゃったの？

また連れて行つてくれるんじよ？
そばにいてくれるんじよ？
来年もつていつたじやん。。。

なのに私を置いていつちやうんだね。

私と共に約束も
置いていつちやうのかな。

ねえ
雅人
・
・
・。

私と約束を置かなければして君は飛び立つ。（後書き）

過去編疲れるねー・・・。

記憶から消す愛しかった君。（前書き）

遅くなりましたっ！！

記憶から消す愛しかった君。

「ははっ・・・。」

ひらひらと桜は散つてゆくなか
自嘲氣味に笑う。

雅人がいなくなつた日から私は
毎日毎日心あらずで。

みんなに心配かけて

ふらふらになるまで雅人がいそうな所へ
探しに行つて。

ずっとずっと追いかけた。
探し続けてた。

でも . . . でも ! !

雅人はどこにもいなかつた ! !

私と約束を置き去りにして。

もう私は”雅人”を探さない。

諦めるの、雅人を。

忘れるの . . . 。

明日から高校2年なんだから . . . 。

記憶から消す愛しかった君。（後書き）

過去終了形。

離れられない運命。(前書き)

頑張つたb()キヨシ

離れられない運命。

綺麗にクリーニングした制服を身に纏い
自然と背筋がのびる。

「今日から高2かー・・・。」

少し気合をいれて家を出る。

私が通っているのは桜之塚高校。
名の通り春には桜が満開になる。

「クラス表は・・・つとすみません。」

トスツと誰かにぶつかる。

「いえ、大丈夫ですか？」

ふと顔をあげると”雅人”がいた。

「雅人 . . . ?」

「え . . . ?」

「雅人でしょ？やつと会えた . . . 。」

私は少し涙ぐむ。

「雅人 . . . ？俺は雅人つて人じやないよ？」

「え . . . ?」

雅人じやない . . . ?

顔がそつくりで黒髪、雅人と一緒なのに . . . ?

「俺は元2組、織原 おりはら 彩人。さいと」

「あ、私は元8組、山岸紗奈。」

「元8組だつたら俺のこと知らなくとも
当たり前だね。」

優しい微笑みを向ける。

雅人と瓜二つだ . . . 。

「校舎違うしあわないもんね。」

「そうだね。」

校舎は2組と8組は端と端だから

会うことはまずない。

じゃなければ私がもつと早く気付いてたはずだ。
こんなに雅人に似てるなら . . . 。

「んじゅ、改めてようひじく。」

「え・・・？」

「だつて紗奈ちゃんは2年6組に名前があつたよ。俺、6組だもん。」

「そうだったんだ。ようひじく。」

そつこつて握手をかわす。

まさか雅人そつくりな人がいるなんて・・・。
忘れてても忘れられない運命なのかな。

離れられない運命。 (後書き)

疲れたああああああああああああああああ))

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2872z/>

星空の約束

2012年1月14日16時59分発行